

ニセモノは通すな!

—世界最大級の国際卸売市場を擁する義烏税関の奮闘—



義烏市を臨む。右手手前から前方へ湾曲する建物が「義烏国際商貿城（福田市場）」の第一期部分。これだけでも広大であるが、現在は同規模の建物が第5期まで完成している。



検査現場で検査を受けるコンテナトラックの列。
義烏税関では1日平均100台のコンテナトラックの検査を行う。



義烏市場（国際商貿城）の内部。50平米程度の卸売店舗が軒を連ねる。その数約62000店舗。



義烏税関の正門前の大通りには、貨物検査と通関手続きのために入場を待つトラックが列をなす。

●**義烏税関による知的財産権保護**
義烏市の対外輸出総額は二〇一〇年の統計で二八億米ドル、輸出量は五七・六万TEUにも上る。モンゴル一国の総輸出に匹敵する量である。これだけの日用雑貨が輸

出される。浙江省では古くから農閑期の軽手工業による日用雑貨製造が盛んであったが、一九八二年、当時の義烏市政府はこの産業を発展させようと日用雑貨の専門卸売市場の建設を決定、「国際商貿城」を初めてとする巨大市場の建設が始まった。これが成功を収め、現在では総面積四〇〇万平米（東京ドーム三〇個分）、店舗数六・二万、取扱商品点数一七〇万種類という圧倒的な規模を誇り、一日あたり二〇万人のバイヤーが訪れる一大物流拠点として発展を遂げた。現在の義烏市のGDPは、一九八五年比で二八〇〇倍という。義烏市はいまや世界最大級の国際卸売市場として認知されるに至っている。

上海から南西に約三〇〇キロ。高速鉄道に乗ること二時間強で到着する義烏市は、浙江省のほぼ中央に位置する人口七四万人の小さな街である。行政区画上「市」となっているが、ハムで有名な金華市の下位に属する県級市だ。紀元前二二二年、秦王朝の時代より「烏傷県」として文献にも登場するこの歴史ある街は、約三〇年前に登場した巨大な卸売市場によって一躍世界にその名を知られるようになった。



義烏税関の検査現場脇には、過去に差し押さえた模倣品の展示室が設置されており、見学希望者には公開されている。

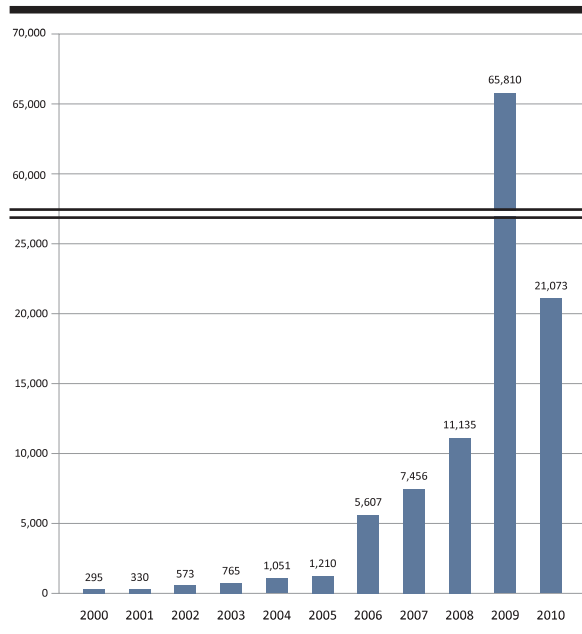


知財権保護において優れた成果を挙げた中国地方当局に謝意を表する顕彰イベントで表彰される義烏税関の代表。
(「在華日資企業知産権保護貢献部門感謝式典」主催IPG/ジェトロ)



義烏税関に飾られた盾やベナント。このような記念品を贈ること、権利者企業や団体は義烏税関の優れた取り組みを称え、感謝の意を表す。

図1 中国税関による知的財産権侵害貨物差押え件数の推移



(出所) 中国海関総署統計

(注) 2009年は「郵便・宅急便専門取締り行動」を実施したため件数が飛び抜けて多い

出されていれば、知的財産権侵害品が混在して不思議はない。中国税関は世界各国の税関と同様、水際での知財権保護の職権を持つと同時に責務を負っているが、義烏税関は全中国の多くの税関の中で、侵害貨物差止めにおいて際だって優れた成果を挙げている税関の一つだ。

大規模な製造業の集積地を後背に有し、同一商品で埋まるコンテナが大量に輸出される臨海部の大規模税関と異なり、義烏税関で扱われる貨物は一つのコンテナ内に何種類もの雑多な貨物が混在し、検査にも非常に手間がかかる。そのハンディを乗り越え、独自に策定した検査手法と検査官の業務に対する真摯な姿勢により、巧妙に隠蔽された模倣品も見事に発見し差止めにつなげている。他税関の模範となるべき取り組みと顕著な成果により、義烏税関は中国政府の上位機関のみならず、国内外の企業（権利者）や中国で模倣品対策をおこなう権利者団体等からも頻繁に顕彰されている。

●中国税関による知的財産権保護

そもそも中国税関はここ数年、水際での知的財産権保護に非常に積極的に取り組んでいる。図1の通り、中国全体での侵害貨物差止め件数はうなぎ登りである。国際的な模倣品の氾濫を防ぐためには、税関による水際差止めが有効なことは言うまでもないが、厳しい貨物検査で通関手続きに時間的ロスを与えることは、速やかな通関による貿易円滑化という税関の本来目的に反する。このジレンマの中で中国税関は、円滑な通関手続きに影響を与えることなく、いかに効率的に膨大な貨物から侵害品を発見するか、という命題に向き合っている。

中国税関の組織構造は、中央統轄機構である税関総署の下に四三箇所の第一級税関があり、その管轄下に第二級税関が全国三〇〇箇所ほど存在する。さらに第二級税関の管轄下にも各通関現場税関が多数存在するが、義烏税関は浙江省のほぼ全域を統括す



通関書類検査で嫌疑を持たれた貨物（高リスク貨物）は、現場検査部門へ貨物検査の指示が出る。リスクの高低により貨物検査は「全量検査」「半量検査」「E字型」「F字型」など、検査する貨物の数量と位置が指定される。



倉庫の内部。荷主が貨物検査を申請し書類確認を受けるカウンターも倉庫内に設置されている。



搬出された貨物のロット番号を確認し、開梱して中身を念入りに検査する。白色の制服は税関職員。紺色の制服は武装警察からの出向検査官。



コンテナ内部は50℃を越えることもある。額に汗を浮かべながら、検査のためにコンテナから貨物を搬出する。

内陸盆地である義烏の夏は三五度を越える日も多い。太陽光を浴びたコンテナ内部はサウナのような暑さ。着用義務の制服を纏う検査官たちは、吹き出す汗をぬぐいつつ貨物を搬出する。開梱検査するのは書類検査で疑義があるとされた貨物だ。搬出された段ボール箱はその場で開かれ、まず内容物を確認。疑義品が発見されたら全て開梱し総量を確定する。疑義品の内容、侵害部分の特徴、数量、輸出先および荷主名など必要情報を権利者に通知し、保管庫で権利者の確認を待つ。確認を経て侵害が確定したら荷主にその旨通知、侵害品として押収する。税関が多大な労力を割いて検査した貨物を確認に来た権利者から「巧妙で侵害品かどうか確定できないから通関させてくれ」と言われることもしばしば。時には「少量だから」という理由でリリースを依頼され、憤慨することもあるという。

●奮闘する義烏税関

義烏税関で開梱検査する貨物量は一日あたりコンテナトラック約一〇〇台分、全通関貨物の六％強である。中国税関による開梱検査率の全国平均は約一％。六％という数字はかなり高い検査率と言えよう。

杭州税関管轄下の第二級税関という位置付けだ。全国の第二級税関の中で知財保護専門の部署を持つのは義烏税関のみ。中国税関が義烏での侵害品輸出阻止をいかに重視しているかが分かる。

二〇一〇年の統計では、義烏税関による侵害貨物の差止め件数は年間四八五件、押収量は二〇〇万点を超える。当然、深圳や上海といった大規模税関による侵害品差止め件数は毎年数千件に及ぶが、そもそも輸出貨物の総量が桁違いだ。港を持たない内陸の第二級税関としては群を抜く成果であると言える。

内部が高温となる夏季はコンテナの上から放水する姿も。



権利侵害が確定した貨物は、巨大な倉庫へ保管され、処分を待つ。ほとんどが廃棄処分となるが、権利者の了承を得たものは、ロゴなどの権利侵害部分を削除した上で赤十字に寄付されたり、オークションにかけられたりする。



義烏税関と権利者企業との意見交換会も頻繁におこなわれている。



侵害の疑いのある貨物の一時保管庫。疑義品発見の通知を受けた権利者はここへ来て現物を確認し、侵害か否かを判断する。

侵害貨物でも輸出の各種手続きを代行する業者が存在する。通関代理や貨物運輸代理など間接的に侵害品輸出に関与する業者が意識を高め、依頼貨物への侵害品混入有無を自ら確認する、あるいは疑義貨物の情報を税関に事前通報するなど、自主的な取り組みが進めば侵害品海外流出の抑止力となる。こういった背景から権利者が通関代理業者との意見交換の必要性を訴えると、義烏税関はすぐに管轄内業者を招集し、交流の場を設けてくれる。税関に限らず中国の行政部門は通常、具体的な案件処理において外国企業に融通を利かす、便宜を図るということは多くないが、日本企業に限らず欧米企業の担当者も、義烏税関は権利者の要望に親身に応えてくれる、と口を揃える。権利者への理解と協力姿勢、必要な活動を速やかに実現する行動力もまた義烏税関の優れた点である。

税関に限らず中国政府関連部門は、国家も地方も、ここ数年知的財産権保護に非常に力を入れ、外国企業との協力も進展している。一方、厳しい取締りから逃れるため、侵害行為は巧妙かつ悪質化しており、知的財産権保護とりわけ模倣品対策は「イタチごっこ」の様相を呈している。義烏をはじめとする中国税関の、そして中国政府の知的財産権保護への取り組みがより大きな成果をもたらすことを期待する一方で、さらなる将来、彼らの取り組みが不要となる、すなわち中国で模倣品が生産され輸出されることが無くなる日が来ることを願う。

(もりなが まさひろ／アジア経済研究所 研究企画課 課長代理)